

荘大さでせまった内容は、「重力兵器ブレーザー砲」と「安全弁」であろうか？ 雄大無比さを期待して、宇宙論にも造詣深い「呉能鐘」氏にお願いしたが、氏は、パルサーの信号解読の方がお好きだったようだ。宇宙現象を地上でシミュレートしようという内容の「台風シーズン」を読むと、一般にふつうの人とは別ものと思われがちな天文学者も、家庭ではまめまめしくたちはたらいっているようである。

「MM」氏は、マリリン・モンローではない。はじめから目をつけてお願いしていたのであるが、奥ゆかしい人でなかなか引き受けて下さらない。毎月毎月、新しい作者をみつけてはお願いするという攻防のなかから次第に腕がみがかれ、最終回になってはじめて「MM」氏籠絡に成功した。

蛇足に蛇足をかさね、本文もやっとここまでやってきた。12人の作者のかただたのような筆の才があれば、私の人生ももう少しかわっていただろう。最後に、何人かに聞かれた質問。

「……月号の作者だれ？」

そして多くの有益な意見は、

「作品の人気投票をしませんか？」

というものである。これの変形が、

「作者のあてっこをしたら？」

というものである。一般に、作者のあてっこはやった。

しかし全部をあてるのは至難のわざであろう。是非試みられたい。ちなみに、別のペンネームで2作品をよせておられるかたがひとりおられる。ひとりひとりにお礼を申し上げたいが、この方には二重にお礼をのべたい。

さて、今年もいよいよおしせまって、12月号の発刊のはこびとなった。編集会議では、来年のこの欄の企画についても話しあいがはじまっている。

「来年も想作天文学を続けようか？」

「いいけど世話役たいへんだったよ。」

「じゃ他に……？」

「ム……。」

「じゃ又、次回に話しあいましょう。」

そんなわけでいままわりの人に聞いてまわっている。

「ねえ、天文月報読んでる？ もう一本いこうか？」

「巻末まで読んでよね。あ、姉さんもう一本！」

「おすしつまんてよ。想作天文学おもしろかったでしょう？」

「もう一年続けるとしたら、さ、どうぞ、あんたも書いてくれる？」

「あそう。じゃ、他にもっといい案ない？」

「ないの？ じゃ、これ、割りかんにしようね。」

(おわり)

新刊紹介

星の物理「第2版」 北村正利 著

(東京大学出版会、定価1200円)

1974年に出版された第一版の改定版。データをあらため、装丁を一新し新しいトピックスもとり入れられているが、全体の構成は変えてない。

著者の専門である連星をバックボーンとしながら、銀河内の星ぼしを全般的にあつかった個性ある好著。

(編集部：平林)

お知らせ

天文学将来計画についてのシンポジウム

標記のシンポジウムが日本学術会議・天文学研究連絡委員会の主催で1983年1月11日(火)10:30-17:00に日本学術会議大会議室にてひらかれます。スペース天文学・太陽電波・位置天文学・光学赤外線天文学の計画を主なテーマとして討議が行われる予定です。

1982年10月の太陽黒点 (g, f) (東京天文台)

1	8,	167	6	—,	—	11	—,	—	16	8,	39	21	6,	52	26	9,	143
2	—,	—	7	—,	—	12	11,	54	17	7,	33	22	8,	88	27	11,	160
3	8,	134	8	—,	—	13	12,	83	18	5,	21	23	12,	84	28	9,	112
4	9,	97	9	—,	—	14	9,	88	19	—,	—	24	9,	100	29	8,	82
5	12,	78	10	8,	80	15	9,	61	20	7,	33	25	10,	129	30	11,	97
															31	5,	47

(相対数月平均値: 125.2)

昭和57年1月20日	発行人	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
印刷発行	印刷所	〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町251	啓文堂 松本印刷
定価 300円	発行所	〒181 東京都三鷹市東京天文台内	社団法人 日本天文学会
		電話 三鷹 31局 (0422-31) 1359	振替口座 東京 6-13595